# 課題3レポート

芦田聖太

提出日 17/07/027

# Ex4.2.1

# 設計方針

- syntax.ml に ty とその出力 pp\_ty を追加
- main.ml に ty の評価とその出力を追加
- typing.ml に評価方法を定義する。

## 実装

syntax.ml

以上のように追加する。テキストに書かれてあるものと同様である。

#### main.ml

```
let rec read_eval_print env tyenv=
  print_string "#";
  flush stdout;
  try
  let decl = Parser.toplevel Lexer.main (Lexing.from_channel
      stdin) in
  let rec repeat env1 tyenv1 x =
    let (ty, newtyenv) = ty_decl tyenv1 x in
let (id, newenv, v, expr) = eval_decl env1 x in
    match expr with
              Nothing → Printf.printf "valu%su:u" id;
                         pp_ty ty;
                          print_string "=";
                         pp_val v;
                         print_newline();
                         read_eval_print newenv newtyenv
let initial_tyenv =
  Environment.extend "iv" TyInt
    (Environment.extend "iii" TyInt (Environment.extend "ii" TyInt
         (Environment.extend "i" TyInt
(Environment.extend "v" TyInt
              (Environment.extend "x" TyInt Environment.empty)))))
let _ = read_eval_print initial_env initial_tyenv
```

read\_eval\_print に引数として initial\_tyenv を追加する。initial\_tyenv は i v を TyInt に束縛した環境である。read\_eval\_print の変更点としては、まず引数 tyenv を増やすことである。次に、与えられた tyenv に関して ty\_decl で評価を行い、Nothing とのマッチング部分に pp\_ty で表記させる。

#### typing.ml

```
let ty_prim op ty1 ty2 = match op with
    Plus -> (match ty1, ty2 with
TyInt, TyInt -> TyInt
                 | _ -> err ("Argument_must_be_of_integer:_+"))
  | Minus -> (match ty1, ty2 with
                    TyInt, TyInt -> TyInt
                     _ -> err ("Argumentumustubeuofuinteger:u+"))
  | Mult \rightarrow (match ty1, ty2 with
                    TyInt, TyInt -> TyInt
                  | _ -> err ("Argument_{\sqcup}must_{\sqcup}be_{\sqcup}of_{\sqcup}integer:_{\sqcup}+"))
  | Lt -> (match ty1, ty2 with
                     TyInt, TyInt -> TyBool
                        -> err ("Argument | must | be | of | integer: | +"))
  | Equal -> (match ty1, ty2 with
                    TyInt, TyInt -> TyInt
                   | _ -> err ("Argument_{\square}must_{\square}be_{\square}of_{\square}integer:_{\square}+"))
  | And -> (match ty1, ty2 with
                    TyBool, TyBool -> TyBool
                   | _ -> err ("Argument_{\sqcup}must_{\sqcup}be_{\sqcup}of_{\sqcup}boolean:_{\sqcup}+"))
  | Or -> (match ty1, ty2 with
                    TyBool, TyBool -> TyBool
                   | _ -> err ("Argument_{\sqcup}must_{\sqcup}be_{\sqcup}of_{\sqcup}boolean:_{\sqcup}+"))
  | Cons -> err "ty_prim_Not_Implemented!"
let rec ty_exp tyenv = function
    Var x ->
       (try Environment.lookup x tyenv with
           Environment.Not_bound -> err ("variable_not_bound:_" ^
                 x))
  | ILit _ -> TyInt
  | BLit _ -> TyBool
| BinOp (op, exp1, exp2) ->
       let tyarg1 = ty_exp tyenv exp1 in
       let tyarg2 = ty_exp tyenv exp2 in
         ty_prim op tyarg1 tyarg2
  | IfExp (exp1, exp2, exp3) ->
      let tyarg0 = ty_exp tyenv exp1 in
       if tyarg0 = TyBool then
       (let tyarg1 = ty_exp tyenv exp2 in
      let tyarg2 = ty_exp tyenv exp3 in
         if tyarg1 = tyarg2 then tyarg1 else err("ifExp_{\sqcup}Not_{\sqcup}
             Implemented!"))
       else err ("Not_{\sqcup}Bool")
  | LetExp (id, exp1, exp2) ->
         let tyarg = ty_exp tyenv exp1 in
         ty_exp (Environment.extend id tyarg tyenv) exp2
  | _ -> err ("ty_exp_Not_Implemented!")
let ty_decl tyenv = function
    Exp e -> (ty_exp tyenv e, tyenv)
  | Decl (x, e) \rightarrow let v = ty_exp tyenv e in (v, Environment.)
```

```
extend x v tyenv)
| _ -> err ("ty_decl_Not_Implemented!")
```

ty\_prim では Plus から Mult までは TyInt と TyInt を受け取って TyInt を返し、Lt と Equal は TyInt と TyInt を受けて TyBool を返す。また、And と Or では TyBool と TyBool を受け取って TyBool を返す。それ以外のときは エラーを起こす。

ty\_exp は ILit から BinOp まではテキストのものと同様である。LetExp では exp1 を評価して、id に s その結果を束縛して exp2 を評価する。if では exp1 を評価して TyBool であれば、exp2 と exp3 を評価し、型が同じであればそ の型を出力する。ty\_decl には Decl を追加している、これによって let 宣言も 型推論が可能となっている。

# Ex4.3.1

#### 設計方針

- pp\_ty には TyVar と TyFun を追加。
- freevar\_ty は TyFun と TyVar を探索していき出てきた型をリスト化して行く。

#### 実装

pp\_ty

型変数は「'a 数字」の形で表すように設定した。TyFun に対しては括弧付きで表記するようにして、x と y に対してもう一度  $pp_ty$  を行うことで型を探索して行くようにした。

freevar\_ty

TyInt と TyFun のときは型変数が存在しないので、empty を返す。 TyVar のときは変数をリストにして返す。 TyFun のときは x と y に関して freevar\_ty を適用して、その結果を union をして統合する。

## Ex4.3.2

## 設計方針

代入のリストと適用する型を引数にとり、代入されて型を出力させる。TyInt と TyBool には代入を適用しても意味がないので、TyVar と TyFun に関して 操作を行う。

## 実装

subst, subst\_type

- 適用される側の型が TyVar のとき、リストが空でなければ、その先頭 の要素を取り出す。取り出した組の 1 項目が TyVar の tyvar と等しければ、代入を適用して組の 2 項目に subst\_type をさらに適用する。等しくなければ先頭要素を除いた型代入リストと代入される型を引数にして subst\_type を行う。
- 適用される側の型が TyFun のとき、両項に subst\_type を同じ型代入リストで適用する。

以上の操作により型代入を行うことができる。

## Ex4.3.3

## 設計方針

与えられた等式集合の考えられるパターンに対してそれぞれ操作を定義して行く。明らかに等式なり得ない組が現れた場合はエラーとして検出する。

#### 実装

unify

```
let rec subst_eqs s eqs = match eqs with
                           [] -> []
                         | (a, b) :: rest -> (subst_type s a,
                             subst_type s b) :: (subst_eqs s rest
let rec unify a =
 match a with
     [] -> []
    | x :: rest ->
        match x with
            (TyInt , TyInt) -> unify rest
          | (TyVar tyvar, TyBool) -> [ (tyvar, TyBool) ] @ unify
          ( subst_eqs [(tyvar, TyBool)] rest )
| (TyVar tyvar, TyFun(b, c)) -> let varlist =
              freevar_ty (TyFun (b, c)) in
                                        if MySet.member tyvar
                                            varlist then err("can'
                                            t_{\sqcup}unify1")
                                        else [(tyvar, TyFun(b, c)
                                            )] @ unify ( subst_eqs
                                             [(tyvar, TyFun(b, c))
                                            ] rest )
          | (TyInt, TyVar tyvar) \rightarrow [ (tyvar, TyInt) ] @ unify (
               subst_eqs [(tyvar, TyInt)] rest )
          | (TyBool, TyVar tyvar) -> [ (tyvar, TyBool) ] @ unify
                ( subst_eqs [(tyvar, TyBool)] rest )
          | (TyFun(a, b), TyVar tyvar) -> let varlist =
              freevar_ty (TyFun (a, b)) in
                                        if MySet.member tyvar
                                            varlist then err("can'
                                            t_{\perp}unify2")
                                        else [ (tyvar, TyFun(a,b))
] @ unify ( subst_eqs
                                             [(tyvar, TyFun(a,b))]
                                             rest )
          | (TyFun (x1, y1), TyFun (x2, y2)) -> unify( [(x1, x2)
               ; (y1, y2)] @ rest)
          | (TyVar tyvar, TyVar b) \rightarrow if (tyvar = b) then unify
              rest else
                                    [ (tyvar, TyVar b) ] @ unify (
                                         subst_eqs [(tyvar, TyVar
                                        b)] rest )
          | (_, _) -> err ("can't_{\perp}unify3")
```

等式集合の先頭要素から順に見て行く。先頭要素のパターンでそれぞれマッチングして行く。

#### (TyInt, TyInt) または (TyBool, TyBool) のとき

もとから型が同じなので型代入を形成する必要がない。残りの等式集合を unify する。

(TyVar, TyInt), (TyVar, TyBool), (TyInt, TyVar), (TyBool, TyVar) のとき TyVar tyvar とする。tyvar から TyInt または TyBool への型代入 A を 作る。先頭要素を除いた等式集合に型代入 A を subst\_eqs で適用した ものを unify して A につづけてリストを返す。(sebst\_eqs は等式集合の 要素となっているそれぞれの組に対して、組の両辺に型代入を適用する

ものである。)

## (TyVar a, TyVar b) のとき

a と b の型変数が等しい時は型代入を形成する必要はないので、残りの等式集合を unify する。等しくないときは tyvar から b への型代入 A を 作る。先頭要素を除いた等式集合に型代入 A を subst\_eqs で適用したものを unify して A につづけてリストを返す。

#### (TyVar a, TyFun) または (TyFun, TyVar a) のとき

freevar\_ty で TyFun の中にある型変数のリスト A を入手する。Myset.member で A のなかに a があるかをチェックする。あればエラーを発生させる。なければ a から TyFun への型代入 B を作る。先頭要素を除いた等式集合に型代入 B を subst\_eqs で適用したものを unify して B につづけてリストを返す。

#### (TyFun(x1, y1), TyFun(x2, y2) のとき

x1 と x2、y1 と y2 は同じ型でないといけないので、(x1, x2),(y1,y2) の 等式と先頭要素を除いた等式集合をつなげて unify を行う。

## Ex4.3.4

型代入の代入後に代入前の型変数が含まれていると、無限ループが発生してしまう。例えば、等式集合 [ (TyVar 'a0, TyFun( 'a1, 'a0 )); (TyVar 'a0, TyInt) ] を考える。unify を行うと型代入 ('a0, TyFun( 'a1, 'a0 )) を (TyVar 'a0, TyInt) に行うことになる。代入結果は (TyFun( 'a1, 'a0 ), TyInt ) となる。この結果には'a0 が含まれているので、さらに型代入 ('a0, TyFun( 'a1, 'a0 )) をする。この操作は無限に行われる。したがって、制約が必要となる。

# Ex4.3.5

## 型推論手続き

#### T-IF

if e1then e2 else e3 の型推論

1.  $\Gamma$ ,e1 を入力として型推論を行い,  $S_1$ ,  $\tau_1$  を得る。

- 2.  $\Gamma$ ,e2を入力として型推論を行い, $S_2$ , $\tau_2$ を得る。
- 3.  $\Gamma$ ,e3 を入力として型推論を行い, $S_3$ ,  $\tau_3$  を得る。
- 4.  $S_1, S_2, S_3$  を等式集合と考えて、 $S_1 \cup S_2 \cup S_3 \cup \{(\tau_1, bool), (\tau_2, \tau_3)\}$  を単一化し、型代入  $S_4$  を得る。
- 5.  $S_4$  と、 $\tau_2$  に  $S_4$  を適用したものを出力する。

#### T-LET

let id = e1 in e2 の型推論

- 1.  $\Gamma$ ,e1 を入力として型推論を行い,  $S_1$ ,  $\tau_1$  を得る。
- 2. id を  $\tau_1$  で拡張した型環境  $\Gamma'$  を作成。
- 3.  $\Gamma'$ ,e2 を入力として型推論を行い  $S_2$ ,  $\tau_2$  を得る。
- $4. S_1, S_2$  を等式集合と考えて、 $S_1 \cup S_2$  を単一化し、型代入  $S_3$  を得る。
- 5.  $S_3$  と、 $\tau_2$  に  $S_3$  を適用したものを出力する。

#### T-ABS

fun x -> e の型推論

- 1. x を新たな型変数  $\tau_1$  で拡張した型環境  $\Gamma'$  を作成。
- 2.  $\Gamma'$ ,e を入力として型推論を行い S,  $\tau_2$  を得る。
- 3. 型代入 S と、 $\tau_1$  に S を適用したものから  $\tau_2$  への関数型を出力する。

#### T-APP

e1 e2 の型推論

- 1.  $\Gamma$ ,e1 を入力として型推論を行い,  $S_1$ ,  $\tau_1$  を得る。
- 2.  $\Gamma$ ,e2を入力として型推論を行い, $S_2$ , $\tau_2$ を得る。
- 3. 新たな型変数 τ<sub>3</sub> を作成。
- 4. 等式 eqs を (関数型  $\tau_2$  から  $\tau_3$ ) =  $\tau_1$  とする。
- 5.  $S_1,S_2$  を等式集合と考えて、 $S_1 \cup S_2 \cup eqs$  を単一化し、型代入  $S_3$  を得る。
- 6. 型代入  $S_3$  と、 $\tau_3$  に  $S_3$  を適用したものを出力する。

#### 設計方針

上記の手続きを元に typing.ml を改造する。

#### 実装

typing.ml

```
let rec ty_exp tyenv = function
  | IfExp (exp1, exp2, exp3) ->
      let (s1, ty1) = ty_exp tyenv exp1 in
      let (s2, ty2) = ty_exp tyenv exp2 in
let (s3, ty3) = ty_exp tyenv exp3 in
      let eqs1 = eqs_of_subst s1 in
      let eqs2 = eqs_of_subst s2 in
      let eqs3 = eqs_of_subst s3 in
      let eqs = eqs1 @ eqs2 @ eqs3 @ [(ty2, ty3); (ty1, TyBool)
          l in
      let s4 = unify eqs in (s4, subst_type s4 ty2)
  | LetExp (id, exp1, exp2) \rightarrow
        let (a, b) = ty_exp tyenv exp1 in
let (c, d) = ty_exp (Environment.extend id b tyenv) exp2
             in
        let s = unify( eqs_of_subst (c @ a) ) in (s, subst_type
             sd)
  | FunExp (id, exp) ->
let domty = TyVar (fresh_tyvar ()) in
    let s, ranty =
      ty_exp (Environment.extend id domty tyenv) exp in
       (s, TyFun (subst_type s domty, ranty))
  | AppExp (exp1, exp2) ->
        let (s1, ty1) = ty_exp tyenv exp1 in
        let (s2, ty2) = ty_exp tyenv exp2 in
        let eqs1 = eqs_of_subst s1 in
         let eqs2 = eqs_of_subst s2 in
        let midty1 = TyVar (fresh_tyvar()) in
        let midty2 = TyVar (fresh_tyvar()) in
        let eqs = eqs1 @ eqs2 @ [ (TyFun (midty1, midty2) , ty1)
             ; (midty1, ty2) ] in
        let s3 = unify eqs in (s3, subst_type s3 midty2)
  | _ -> err ("ty_exp_Not_Implemented!")
```

#### **IfExp**

 $\exp 1 \sim \exp 3$  についてそれぞれ  $\operatorname{ty\_exp}$  で型の評価を行う。等式集合に  $(\operatorname{ty2},\operatorname{ty3})$  と  $(\operatorname{ty1},\operatorname{TyBool})$  を加える  $(\operatorname{ty1}\sim\operatorname{ty3}$  はそれぞれ  $\operatorname{exp1}\sim\operatorname{exp3}$  の評価結果の型)。 追加することで、 $\operatorname{unify}$  を行うときに  $\operatorname{exp1}$  が bool か どうかということと  $\operatorname{exp2}$  と  $\operatorname{exp3}$  の型が等しいかどうかを確認できる。 得られた等式集合を単一化して型代入のリストと  $\operatorname{ty2}$  に型代入を適用したものを返す。

#### LetExp

 $\exp 1$  を評価してその結果を id に束縛して新たな環境を構築。得られた 環境で  $\exp 2$  を評価。 $\exp 1$  と  $\exp 2$  で得られた型代入を unify したもの を  $\exp 2$  で得られた型に適用する。最後に、unify された型代入と  $\exp 2$  に型代入した結果を返す。

#### **AppExp**

exp1 と exp2 を評価する。(評価結果はそれぞれ ty1, ty2) 新たな型変数 a,b を作り、新たな TyVar a と TyVar b を作る。等式集合に (TyFun (TyVar a, TyVar b), ty1) と (TyVar a, ty2) を追加する。追加することで、exp1 が関数であるかどうかということと exp2 が exp1 の引数として妥当かどうかということが確認できる。得られた等式集合を単一化して型代入のリストと TyVar b に型代入を適用したものを返す。

## Ex.4.4.1

#### 設計方針

- freevar\_tysc, freevar\_tyenv, closure を構成。
- ty\_exp で Var x, LetExp, FunExp を改良。

# 実装

 $freevar\_tysc$ 

ty 中の tyvar を feevar\_ty で List 化したのち、MySet.diff でその中から tyvars の要素を除去する。

freevar\_tyenv

fold\_right と freevar\_tysc を使って tyenv 中の各要素 TyScheme 中にあるΓに は自由にでてこない型変数を取り出す。

closure

テキストの仕様をそのまま引用。

ty\_exp

```
type tyenv = tysc Environment.t
. . . . . . . . . . .
let rec ty_exp tyenv = function
    Var x ->
      (try
       let TyScheme (vars, ty) = Environment.lookup x tyenv in
        let s = List.map (fun id -> (id, TyVar (fresh_tyvar ()))
           vars in ([], subst_type s ty)
        with Environment.Not_bound -> err ("variable_not_bound:
             " ^ x))
. . . . . . . . . . . . . . . .
  | LetExp (id, exp1, exp2) ->
let (a, b) = ty_exp tyenv exp1 in
        let tysc = closure b tyenv a in
        let (c, d) = ty_exp (Environment.extend id tysc tyenv)
             exp2 in
        let s = unify( eqs_of_subst (c @ a) ) in (s, subst_type
            s d)
  | FunExp (id, exp) ->
    let domty = TyVar (fresh_tyvar ()) in
      let s, ranty =
        ty_exp (Environment.extend id (TyScheme([], domty ))
             tyenv) exp in
         (s, TyFun (subst_type s domty, ranty))
  | _ -> err ("ty_exp_{\sqcup}Not_{\sqcup}Implemented!")
```

まず初めに、環境を tysc の Environment.t とする。次に Var x についてはテキストと同様の変更を加える。LetExp では exp1 を評価し、関数 closure を使って型スキームを入手する。その後、得た型スキームで id を束縛したのち exp2 を評価。返す値はそれまでのものと同様。FunExp の変更は環境の拡張を型スキームにするのみである。

# Ex.4.3.6 & Ex.4.4.2

## 設計方針

- ty\_exp で LetRec を追加する。
- ty\_decl で RecDecl を追加する。

# 実装

typing.ml

```
let rec ty_exp tyenv = function
  | LetRecExp (id, para, exp1, exp2) ->
         let dummyTy = TyVar( fresh_tyvar() ) in
let paraty1 = TyVar( fresh_tyvar() ) in
         let dummyEnv =
                  Environment.extend para (TyScheme([], paraty1))
                            (Environment.extend id (TyScheme([],
                                 dummyTy)) tyenv) in
         let (s1, ty2) = ty_exp dummyEnv exp1 in
         let eqs = [(dummyTy, TyFun(paraty1, ty2))] in
let subst1 = unify ((eqs_of_subst s1) @ eqs) in
         let ty3 = subst_type subst1 dummyTy in
         let tysc = closure ty3 tyenv s1 in
         let (s3, ty5) = ty_exp (Environment.extend id tysc tyenv
             ) exp2 in
         let subst2 = unify(eqs_of_subst (subst1 @ s3)) in (
    subst2, subst_type subst2 ty5)
let ty_decl tyenv = function
  | RecDecl (id, para, exp) -> let dummyTy = TyVar( fresh_tyvar
       () ) in
         let paraty1 = TyVar( fresh_tyvar() ) in
         let newenv1 =
                  Environment.extend para (TyScheme([], paraty1))
                            (Environment.extend id (TyScheme([],
                                dummyTy)) tyenv) in
         let (s1, ty2) = ty_exp newenv1 exp in
         let eqs = [(dummyTy, TyFun(paraty1, ty2))] in
let subst1 = unify (eqs @ (eqs_of_subst s1)) in
         let ty3 = subst_type subst1 dummyTy in
         let tysc = closure ty3 tyenv s1 in (ty3, Environment.
              extend id tysc tyenv)
```

id と para をダミーの環境で新しく生成した型変数で束縛する。ダミー環境を使って  $\exp 1(\text{RecDecl } \text{の場合は } \exp)$  を評価して、評価値 (s1, ty1) を得る。等式 para から ty1 への関数型 = id の型を、s1 と unify して subst1 を得る。

id の dummy の型変数 dummyTy に subst1 を適用し、id の本当の型 (ty3) を得る。ty3 を dummyEnv ではなくて tyenv で closure を行い型スキームを得る。あとは LetExp と同じ操作である。

#### 全体テスト

```
# let s = fun x -> fun y -> if x y then y + 1 else y - 9;;
val s : ((int -> bool) -> (int -> int)) = <fun>
# fun x -> x x;;
can't unify
# let f = fun x -> x in if f true then f 3 else f 4;;
val - : int = 3
# let rec f = fun n -> n in if f true then else f 1 else 3;;
val - : int = 1
```

以上のテストはきちんと型推論ができている。

- 1. let 宣言,fun 式,if 式, 関数適用がうまく機能していることが確認できている。また、x が int -> bool で y が int になっていることから型変数から型への変換が unify できちんと行われていることが確認できる。
- 2. 課題 4.3.4 でもあったように無限の操作を防ぐために unify で型代入の 変換先に変換前の型変数があるとエラーを起こすように設定してある。 この式ではそれが確認できている。
- 3. fun の部分で使われている型変数のうち f を評価している際に用いられる型環境で自由に用いられていないものを closure で取り出し f のスキーマとすることで、多相型を実現している。
- 4. let rec の型推論とともに let rec の多相型の実装もできていることが確認できる。f をダミーの環境で評価して、関数型を入手する。得た型を本当の環境で closure を行うことできちんと多相型として機能するようになる。

# 感想

補助関数の定義に苦労した。補助関数の定義を行うためには全体を理解していないといけなかったが、あまり理解せずに作ってしまった。そのため本体の定義の部分で関数が間違っているのか式本体が誤っているかがはっきりとしなかった。特に苦労したのは unify だった。自分で作った最初の定義では、型代入の順番が正しい代入とは正反対になっておりそれに気付くのにかなりの時間がかかった。unify がうまくいってからはそれほど苦労はしなかっ

た。きちんと全体の見通しをつけてからプログラムを組むことの大事さをこ の演習を通して気付くことができた。